

# 言葉を自覚的に用いながらより良い考えを創り上げる 子供を育む国語科の授業

## I 主題設定の理由

言葉は、学習活動を支えるものであり、全ての教科等における資質・能力の育成や学習の基盤であるが、最近では、電子メールやSNSなどに見られるように、比較的短い時間や量でやりとりが行われるようになるなど、情報化の進展に伴い、言葉を取り巻く環境が大きく変化してきている。また、多様化した現代において、求められるコミュニケーションについて、平成30年文化審議会国語分科会の「分かり合うための言語コミュニケーション（報告）」によると、「価値観が更に多様化し、共通の基盤が見付けにくくなるおそれのあるこれからの時代については、互いの異なりを乗り越えて歩み寄ることがこれまで以上に求められるであろう。そのためには、言葉によって考え方や気持ちを表し、互いに対する理解を深めていくことが欠かせない」<sup>1)</sup>とあり、コミュニケーションにおける言葉の役割の重要性が述べられている。

そのような状況と併せて、平成28年中教審答申2-2「各教科・科目等の見直し1国語」では、国語科における授業改善のために、「学習を振り返る際、子供自身が自分の学びや変容を見取り自分の学びを自覚することができ、説明したり評価したりすること」<sup>2)</sup>や、「互いの知見を広げたり、深めたり、高めたりする言語活動を行う学習場면을計画的に設けること」<sup>3)</sup>、「子供自身が自分の思考の過程をたどり、自分が理解したり表現したりした言葉を、創造的・論理的思考の側面、感性・情緒の側面、他者とのコミュニケーションの側面からどのように捉えたのか問い直して、理解し直したり表現し直したりしながら思いや考えを深めること」<sup>4)</sup>といった、主体的・対話的で深い学びの実現を意識した視点の重要性が挙げられている。

以上のような現状から、本校国語科では、子供たちの言葉の用い方に着目した。学習活動やコミュニケーションを支えている言葉がもつ価値を認識し、言語感覚を豊かにすることで、言葉を通じて自己を表現したり、対象や他者に共感したりすることができるようになることを考える。複雑で予測困難な社会の中で起きる様々な問題に対して、創造的に対応していく力を身に付けることが求められている現在、国語科において、自分の中にある思いや考えを表すことができるように、言葉のもつ意味や働き、伝わり方や使い方等について問い返したり、捉え直したりして適切に用いる、すなわち、言葉を自覚的に用いながらよりよい考えを創り上げる力を身に付けさせることが大切である。

前研究シリーズ「言葉を用いて熟考し、自分の考え<sup>注1)</sup>を筋道を立てて表現することができる子どもを育む国語科の授業」では、子供たちは、より確かな根拠を基にして、自分の考えと他者の考えの共通点や相違点を導き出した上で改めて自分の考えを形成したり、読み手を納得させることができるように文章構成や表現の仕方を工夫したり、それらを見直してよりよいものにしたりするようになった。しかし、自分の考えを他者に伝える際に、言葉の意味や伝わり方を十分に吟味せずに言葉を用いてしまったために、自分の考えの根拠や意図までを十分に伝えられず、共有しきれない姿が見られた。

こうしたことから、研究主題を「言葉を自覚的に用いながらよりよい考えを創り上げる子供を育む国語科の授業」と設定し、研究を進めることとした。

## Ⅱ 研究の概要

### 1 国語科が目指す子供像

言葉を自覚的に用いながらより良い考えを創り上げることができる子供

### 2 育みたい資質・能力

私たちは、国語科における目指す子供像を達成するために、次のような資質・能力を育てることが必要であると考えた。

- 言葉を自覚的に用いながら自分の考えを形成する力
- 形成した考えを基に言葉を自覚的に用いながら表現する力

言葉を自覚的に用いて自分の考えを形成したり、表現したりするためには、次のような関わり合いが必要である。

文章や談話と関わり合うことで、その文章構成や談話構成、文章表現、内容から作者や話者の意図などを捉え、それらを踏まえて自分の考えを形成する。その上で、友達や教師といった他者と関わり合いながら、自分の考えを形成し直す。この自分の考えを形成する過程では、常に自分自身と関わり合いながら、言葉を自覚的に用いることで、考えの精緻化が行われると考える。

また、他者との関わり合いを通して、形成した自分の考えを基に、伝えたい内容が相手に伝わり、納得させられるような表現にしていく。その際には、伝えたい内容に対して用いた言葉がふさわしいかや、この表現で伝えたいことが十分に伝わるかといった、言葉を自覚的に用いて自分自身と関わり合うことが常に行われていくと考える。

上記のような資質・能力を育むために、言葉がもつ価値を認識するとともに、言語感覚を豊かにし、国語の文化に関わることで、国語を尊重して、その能力の向上を図る態度を喚起していくことが必要である。

### 3 資質・能力を育むための手立て

本校国語科では、単元で身に付けさせたい事柄に基づいて、子供に取り組みさせる課題を設定し、その課題の解決を目指して行う活動を「言語活動」と位置づけた。「言語活動」を設定することで、子供に、その単元において構成された学習活動の一つ一つに必然性や目的意識をもって取り組ませることができる。国語科における育みたい資質・能力を支える「言語活動」は、主に、「聞く」「読む」という自分の考えの形成に関わる行為と、「話す」「書く」という自分の考えの表現に関わる行為で構成されていると考える。単元で身に付けさせたい事柄を明確にした上で、単元内の場面ごとに国語科における二つの育みたい資質・能力のどちらかに焦点を絞り、これらの行為を組み合わせる。その中でも自分の考えを形成する場面については、「ひとり読み（聞き）<sup>注2)</sup>」「読み（捉え）の交流<sup>注3)</sup>」を、自分の考えを表現する場面については、課題に応じて表現したものを基に「意見交流<sup>注4)</sup>」を行うという学習の流れを基本とし、以下のような手立てを設定することにした。

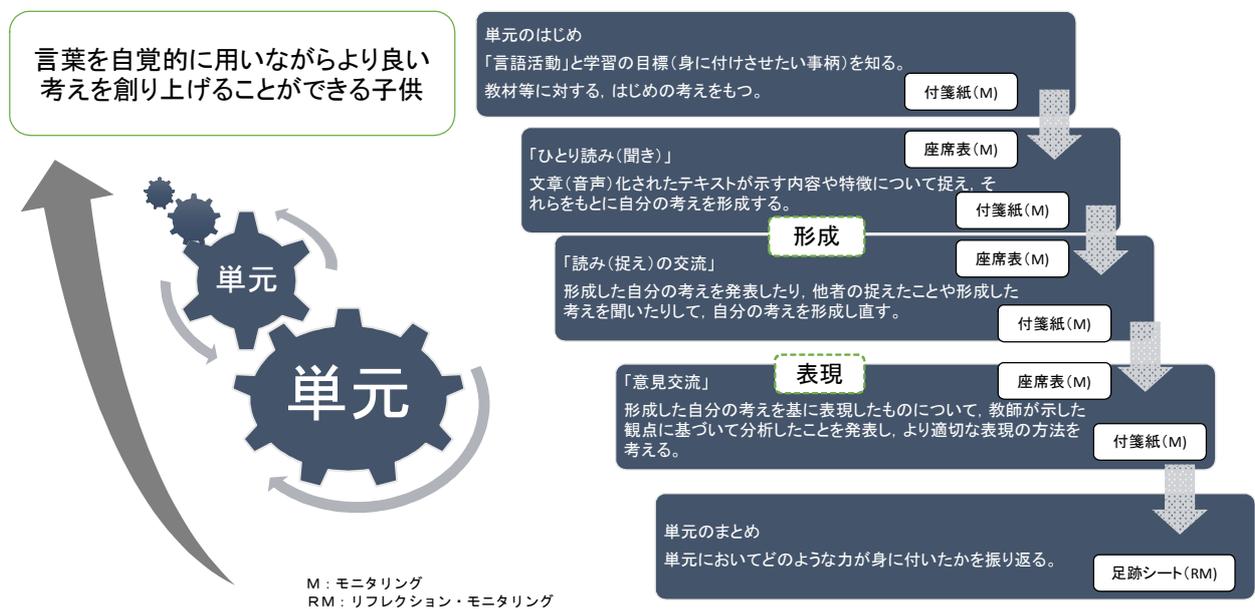
#### (1) 拡散的思考と収束的思考を働かせるための「読みの交流」「意見交流」の位置付け

「読みの交流」「意見交流」を行う際に、拡散的思考と収束的思考を働かせるための二つの発

問をする。一つ目の発問は、授業の前半に「読みの交流」のテーマや、「意見交流」の観点に基づいて他者の考えを聞くことで、新たな考えが生み出されるような発問（拡散的思考を促す発問）をし、二つ目の発問は、授業の後半に、発表された考えと自分の考えとを比較したり関連付けたりしながら、自分の考えを再形成させることができるような発問（収束的思考を促す発問）をする。授業の終わりには、自分の考えを付箋紙に記述させ、次時の最初に一覧表である「座席表」を配布する。こうすることで、自分の考えや他者の考えについて言葉を自覚的に用いながら様々な考えに触れることができ、その上で課題に対してより良い自分の考えを形成したり、形成した考えを基に表現したりすることができるように考える。

(2) 「モニタリング」と「リフレクション・モニタリング」

本校国語科では以下のように「モニタリング」と「リフレクション・モニタリング」を位置づける。



【目指す子供像に向けたモニタリングとリフレクション・モニタリングの単元における位置付け】

「モニタリング」については、「ひとり読み」「読みの交流」「意見交流」等の終わりに行う。単元内のそれぞれの学習活動の終わりに、付箋紙を用いて自分の考えを表出させることで、学習活動の中で出された考えの中から、自分の考えを形成するために何を取り入れ、何を取り入れなかったかを把握させる。その後、次時の最初に「座席表」として配布し、友達のことを目にさせたり、その内容について質問させたりすることで、他者がどのような考えを取り入れたかや、どのような流れで考えを形成していったかを、自分と比較させる。そうすることで、他者の考えと比較したり関連付けたりしながら自分の考えを再形成させる。また、学習活動を通して言葉がもつ価値を認識させる。

「リフレクション・モニタリング」については、単元の最後の「まとめの時間」に行う。単元の最後に、単元においてどのような力が身に付いたかを振り返らせるために、以下に示す三点に絞って記述させる。一点目は、単元のはじめに確認したこの単元で身に付ける事柄を子供たちに確認させたのち、どのような力が身に付いたかを振り返らせる。二点目に、この単元で身に付けた力がこれまでの学習や生活の何とどのように結び付けることができるかを考えさせる。そして

三点目は、この単元で身に付けた力が、今後どのような場面でいかしていけそうかを考えさせる。それらを「足跡シート」に書かせることで、他者の考えと比較したり関連付けたりしながら自分の考えを再形成することができたか、また、学習活動を通して言葉がもつ価値を認識することができたかを振り返らせる。

#### 4 資質・能力が育まれたかの評価について

育みたい資質・能力が子供たちにどの程度育まれたかを評価することで、手立ての有効性を検証していく。

自分の考えを形成する力については「ひとり読み」の記述を本校国語科の評価指標を用いて、単元の始めにおける一人一人の考えを形成する力を見取るとともに、学級全体の傾向を把握する。また、「足跡シート」に自分の考えを記述した付箋紙を並べて一覧させる。そして、「読みの交流」を踏まえて、どの程度自分の考えを形成する力が育まれたのかを、付箋紙を含む「足跡シート」の記述を一覧し、単元における考えの変容を分析することで見取っていく。自分の考えを表現する力については、形成した自分の考えを他者に伝わるように表現しているかどうかについて、自分の考えが表現された文章から読み取り、本校国語科の評価指標と照らし合わせ分析することで見取っていく。

また、抽出生徒を設定し、授業における様子を見取することで、検証の一助としていく。

#### 5 1年次のねらい

- 資質・能力を育むための二つの手立てが有効であったかを検証する。
- 「モニタリング」と「リフレクション・モニタリング」の方法を具体化する。

注1) 自分の考えとは、文章や談話において何が書かれていたり述べられていたりするかを捉え、その捉えた内容を更に自分の知識や経験と関連付けて、自分や他者が納得できる状態に形成された考えのことであり、言葉によって筋道立てて説明できる状態として表出したものを指す。

注2) 「ひとり読み」とは、文章化されたテキストが示す内容や特徴について捉え、それらを基に自分の考えを形成する活動である。

「ひとり聞き」とは、音声化されたテキストが示す内容や特徴について捉え、それらを基に自分の考えを形成する活動である。

注3) 「読みの交流」とは、「ひとり読み」で捉えたことや形成した自分の考えを発表したり、他者の捉えたことや形成した考えを聞いたりすることを通して自分の考えを形成し直す活動である。「捉えの交流」とは、「ひとり聞き」で捉えたことや形成した自分の考えを発表したり、他者の捉えたことや形成した考えを聞いたりすることを通して自分の考えを形成し直す活動である。

注4) 「意見交流」とは、形成した自分の考えを基にして表現したものについて、教師が示した観点に基づいて分析したことを発表し合い、より適切な表現の仕方を考える活動である。推敲の前に行う。

#### 引用文献

- 1) 文化審議会国語分科会『分かり合うための言語コミュニケーション』, 2018年, 16ページ
- 2) 中教審『中教審答申2-2各教科・科目等の見直し 1国語』, 2016年, 130ページ
- 3) 2) に同じ
- 4) 2) に同じ

#### 参考文献

- 井上尚美『思考力育成への方略—メタ認知・自己学習・言語論理(増補新版)』明治図書, 2007年
- 「国語教育」編集部『平成29年度版 学習指導要領改訂のポイント 小学校・中学校国語』明治図書, 2017年
- 国立教育政策研究所『国研ライブラリー 資質・能力 理論編』東洋館出版社, 2016年

## 国語科

同『教育課程の編成に関する基礎的研究報告書 5 社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原理』, 2013年  
同『資質・能力を育成する教育課程の在り方に関する研究報告書 1 ～使って育てて21世紀を生き抜くための資質・能力～』, 2015年

C・ファデル, M・ビアリック, B・トリリング『21世紀の学習者と教育の4つの次元—知識, スキル, 人間性, そしてメタ学習—』北大路書房, 2016年

西岡加名恵『逆向き設計で確かな学力を保障する』明治図書, 2016年

文部科学省『中学校学習指導要領解説 総則編』文部科学省, 2017年

同『中学校学習指導要領解説 国語編』文部科学省, 2017年